

# 京都検定 よもやま話

第24回

京都検定講演会講師による「よもやま話」。  
京都検定を通じて、京都の魅力を再発見しましょう。



山村純也  
株式会社らくたび  
代表取締役

## 京都検定的な切り口で語る「京都の舟運史・水運」

京都の舟運史・水運は、平安京造営時、中心部に堀川が開削され運河として活用するところから始まります。

平安末期には白河上皇によって都の南方に鳥羽離宮が営まれ、当時は巨椋池に接して大きな入江となっていたことから、都の玄関口として活用されました。中世の

都で活気を失った京都の産業や文化を育み、復活の基盤となりました。現在でも京都市民の水道水の供給源として重要な役割を果たしており、水路橋や著名人が扁額を揮毫したトンネル、保存された「インクライン」や「ねじりまんぼ」は文化財としても評価されています。近年は岡崎の十石舟やびわ湖疏水船の就航等、観光分野でも急速にその価値を高めています。

終わりにには豊臣秀吉によって伏見港が整備され、伏見城を中心とした城下町が三十石船による人や物資の輸送で賑わいました。江戸時代に入ると、角倉了以が保津川を整備したことで丹波からの舟運が飛躍的に発達、同時期に鴨川沿いに開削された高瀬川は、京都と大坂を結ぶ重要な交通路として機能し、京都の経済発展に大きく貢献しました。

このように、京都の舟運史・水運は、平安時代から現代に至るまで、都市の発展と文化の形成に深く関わってきました。単なる交通や運輸手段としてだけでなく、文学や芸術的価値、さらに観光の源泉として、大きな役割を果たし続けています。

明治中期頃から保津川下りは荷船から「遊船」へと転換。文人たちにも親しまれ、多くの作品に登場します。例えば、夏目漱石はその様子を小説『虞美人草』に、野田宇太郎は『関西文学散歩』に、井伏鱒二は『七つの街道』に、それぞれ描写しました。

明治23（1890）年には、北垣国道、田邊朔郎らの尽力で琵琶湖疏水が完成し、事実上の遷



桜並木を進むびわ湖疏水船

都

※「京都・観光文化検定試験」、「京都検定」およびそのロゴマークは、京都商工会議所の商標です。無断で使用することはできません。

2025年度の京都検定  
実施概要・公開テーマが  
決まりました！

### 第26回

試験日 2025年7月13日(日)

〔3級〕10時

会場 京都市内施設

公開テーマ

〔3級〕京の観音巡り

### 第27回

試験日 2025年12月14日(日)

〔3級〕10時

〔2級・1級〕13時30分

会場 京都市内・東京都内施設

公開テーマ

〔3級〕京都の松・竹・梅

〔2級〕京都の博物館・美術館

〔1級〕昭和期の京都

### 受験料

〔3級〕3850円（団体3080円）

〔2級〕4950円（団体3960円）

〔1級〕7700円（団体6160円）

※団体割引については、1団体で10名以上の受験者を取りまとめてお申し込みいただくことが条件。  
※一般申込については、システム利用手数料550円(税込)が別途必要。